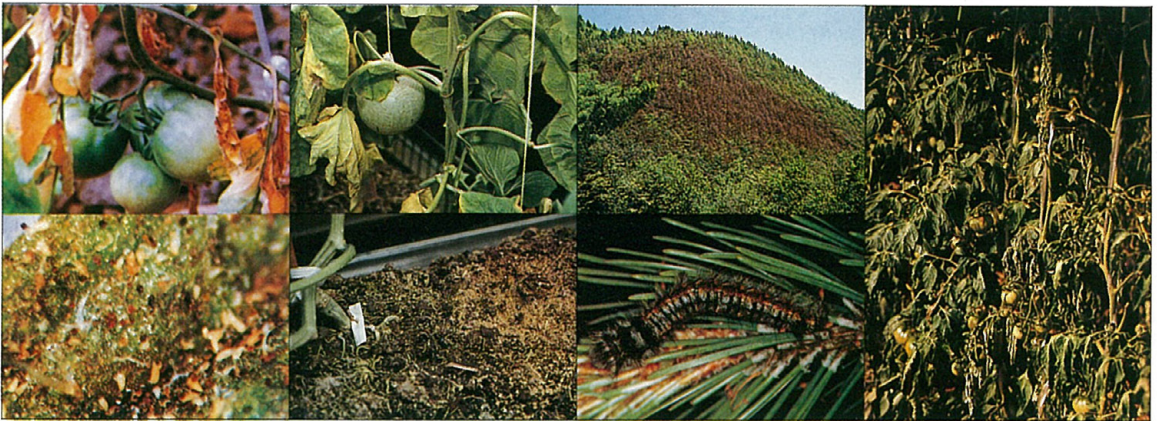


各地で話題の病虫害



トマトサビダニ(仮称)

沖縄県農業試験場 金城常雄氏提供

マスクメロン毛根病

静岡県農業試験場 牧野孝宏氏提供

マツカレハ

林業試験場北海道支場 古田成章氏提供

トマト萎ちょう病 レースJ3

長野県野菜花き試験場 石坂尊雄氏提供

トマトサビダニ(仮称)

学名: *Aculops lycopersici* (Masse)

英名: Tomoto russet mite

今年5月、沖縄県下の施設栽培トマトにサビダニによる被害が発生した。

本虫は、本邦未記録の *Aculops lycopersici* (Masse) (仮称: トマトサビダニ) であることが判明した (埼玉県園芸試験場 根本久氏同定)。

本種はフシダニ科に属し、体形はくさび型、体長150~200 μ m、体幅55 μ mの超微小の害虫で、体色は黄赤褐色を呈している。

体は前胴体部と後体部(腹部)に分けられ、前胴体部には鋏角、触肢、2対の脚などの付属肢がある。背板はほぼ三角形をなし、その後縁上から生じる1対の背毛は後側方へ向い、腹部の環節は背面で27、腹面で60~65であることは、本種の重要な特徴となっている。

分布地域は広く、ほぼ全世界に生息しているが、わが国での発生は記録されていなかった。

寄主植物として、トマト、ナス、ジャガイモなどのナス科植物28種が知られている。

被害をうけたトマトの症状は葉の裏面が光沢を帯びてサビ色を呈し、葉の先端部から黄変する。

さらに症状が進むと生育不良となり、ついには枯死するため、本虫が多数発生した場合は収穫皆無になることがある。

防除法としては、ケルセン乳剤・水和硫黄剤・キノキサリン系水和剤・アセフェート水和剤などの薬剤散布が効果的である。

また、本種は乾燥すると多発する傾向があるので、湿度を高く保つことも有効な防除手段である。

マスクメロン毛根病

学名: *Agrobacterium rhizogenes*

(Riker et al.) Conn

昨年5月、静岡県菊川町のメロン温室栽培団地の一部で、根が地上部に多数発生するバラ毛根病に類似した病害が発生した。その後発生は広がり、同年9月には同団地内全域にまん延した。

病原菌は、静岡県農業試験場が分離、同定調査を行った結果、*Agrobacterium rhizogenes* と同定され“マスクメロン毛根病”と命名された。

本細菌は1~3本の周毛を有するグラム陰性菌で、白色のコロニーを作り、蛍光色素は産生しない。また、接種試験の結果、メロンのほかスイカ、マクワウリ、カボチャ、ニガウリ、トマト、ダイズにも病原性を示すことが明らかにされた。

本菌によって引き起こされる症状は、根のほか茎、

果実にも発生する。

根では大小のがんしゅが形成され、そこから多数の根が発生する。これらの根は正常な屈地性を示さず毛根状となるため、多数発生すると根が地面に露出した状態になり、地表面が白色を呈する。

茎ではつぎ木部に異常肥大が起り、その表面に短い不定根が多数発生する。

果実では、肥大不良・ネット形成不良・果実の緑化などの品質低下が起る。

防除法としては、施設内の土壌消毒を十分行うことが大切である。

なお、同様の病害が千葉県の実験地にも発生しているので、施設栽培を行っている地域では、注意を要する。

マツカレハ

学名: *Dendrolimus spectabilis*
Butler
英名: Pine caterpillar

本州各地で、クロマツ・アカマツの害虫として知られているマツカレハは、これまで北海道での大発生はみられなかったが、昨年の秋、北海道南部のきこない木古内町にある東京大学北海道演習林のストロブマツ造林地で大発生した。ストロブマツでの発生は、これ以前には岩手県で報告されているにすぎない。

本種はカレハガ科に属し、幼虫はマツケムシと呼ばれ、マツ類の食葉性害虫として最も重要な種である。カレハガ科に属する種は、わが国では20種ほど知られているが、針葉樹を食害するものは、わずかにマツカレハとツガカレハの2種である。

この両種は成虫・幼虫ともによく似ている。

両種の区別点は成虫で雄の翅端がツガカレハではやや尖ること、触角の櫛歯状突起が黒褐色であること、前翅の垂外縁の黒紋列が脈2～3の間で深く入り込むことなどである。

マツカレハは北海道南部以南の日本全土及び中

国、韓国、シベリアに分布する。

通常、年1回の発生であるが、暖地においては年2回の地帯もかなりみられる。

5月ごろから成虫が発生しはじめ7月から8月にかけて個体数が多くなり、被害がでる。

トマト萎ちょう病 レースJ3

学名: *Fusarium oxysporum* Schlechtendahl
f. sp. *lycopersici* (Saccardo)
Snyder et Hansen
英名: *Fusarium wilt*

昨年3月、長野県松本市島立地区の施設栽培のトマトに、導管が褐変し萎ちょう症状を起す病害が発生した。

長野県はり病株から病原菌を分離し同定した結果、*Fusarium oxysporum* f. sp. *lycopersici* であることを確認し、当病害を“トマト萎ちょう病”と診断した。

本菌は不完全菌の一種で、三日月形の大型分生孢子、小型分生孢子及び円形もしくは楕円形の厚膜孢子を形成する。

トマト萎ちょう病にはレースJ1、J2、J3、の3系統が知られており、いずれも根・茎・葉を侵し、り病株は黄化萎ちょうして激しい場合は枯死する。

今回、長野県で発生した本病は低温期に発生していること、葉の先端部から萎ちょうすることなどの特徴のほか、レースJ3の感受性品種である「ときめき」に病原性を示すことから、レースJ3によると判定された。

レースJ3は昭和40年頃、高知県ではじめて発生が確認され、その後各地の施設栽培トマトに発生し大きな被害をもたらしているが、長野県での発生は今回が初めてである。

防除法としては、窒素過多にならないよう適正な施肥及び水管理を行うこと、抵抗性品種の導入など耕種の防除法が効果的である。また、発生場所はクロルピクリン剤による土壌消毒を行う。

ジャンボタニシの学名及び和名について

ジャンボタニシの学名及び和名が日本貝類学会研究連絡誌において「*Pomacea canaliculata* (Lamarck, 1819) スクミリンゴガイ」とされた。